

---

# 超能力な学校life

七風

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

超能力な学校Life

### 【コード】

N03910

### 【作者名】

七凧

### 【あらすじ】

超能力研究部を舞台に繰り広げられる、壮大(?)な学園物。

## プロローグ

「で、そんなわけだからぜひ超能力研究部に入って欲しいわけ！」

俺は我が後輩達に強く勧めた。後輩がちよつとかわいそうだと思っただが、このままだと来年には廃部になってしまうのでこちらも退けない。

「いや、超能力研究部ってなにをするんですか？」

「第一それ部活じゃなくて同好会ってやつじゃないっすか!!」

「うん、まあそうだけどさ、楽しいぜ？超研!!」

「いや、だから活動内容を教えてくださいって。」

後輩達が呆れた目で俺を見る。まあ、現在部員が三年二人のみで古い方のコンピュータ室に押し込められているような同好会はうさん臭いだろうと思う。

「例えばー、身近で起こった変なことを調べたりー。」

「なにそれ、めっちゃうさん臭いですね!!」

ざっくり言われた。

「どうせおまえら入る予定の部活なんかないだろー？それに林野は超能力大好きだろ？このサークルではどうしたら超能力が使えるようになるかも研究してるんだぜ!!」

そんなことをずっとグダグダ話していると、もう五時をすぎていた。また来ます、と後輩達はいった。文句を言いながらも多少はこのサークルに興味を示してくれたようで、俺は安心した。

「まあ、普通に楽しんでそうですからね。」

「他にぱっとする部活なかったら入りますよ。」

笑いながらコンピュータ室からでていく後輩達。このタイミングで

言っておくべきだろう。

「おう！！それに学校の近くの林にいる、本物の超能力者に会えるかもしれないからな！！」

驚いて二人とも振り向いた。俺はへらつと笑い、ドアを閉めた。

今の言葉を覚えていてほしい。そしていつかふと思いだし、超能力者を探してみてほしい。その時に俺はいないかもしれないし、彼らを待ち受けるのは悲劇かもしれない。悪いが、頼んだぞ。

そして俺は帰る準備をして、今日も林に向かった――。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0391o/>

---

超能力な学校life

2010年10月10日00時08分発行